関西自然保護機構会誌 *23*（*1*）：*73－77, 2001*

私のワシ・タカ問題（山科からの手紙 3）

京都大学名誉教授　四手井　綱　英

My experience in raptor conservation (Letters from Yamashina 3). Tsunahide Shidei (*Emeritus Professor of Kyoto University*)

ことの起こり

私はもう 90 才に近い老人だ。京都府などの公式の委員会委員はもっと早くやめるべきだったが，なお 2，3 の問題に関わって現在に至っている。その一つが京都市の環境局（前の清掃部）の顧問として関わっている，音羽山の廃棄物処理ダムであることは既に述べた。厄介なもう 1 つの問題はワシ・タカの保護だ。何故私がワシ・タカの保護にかかわるようになったかから話して見よう。私が大学を退職した頃，犬山にある日本モンキーセンター内でいざこざが起り，所員が所長宮地伝三郎氏と対立して，研究も何も満足にやらず，運営に支障が出始めた。スポンサーの名古屋鉄道は大いに困り，その処理について今西錦司さんなどに相談を持ち掛けた。今西さんは，このセンターを造る時大活躍をした人だ。その今西さんが，どういう考えからか，私にモンキーセンターの改革をする委員会の委員長になってくれたと言って来た。

このごたごたの起りは，文部省が初めて，霊長類の研究所を認め，京都大学の付属機関として造ることになったことに端を発する。その新しく設立される霊長類研究所のため，名古屋鉄道はモンキーセンターの隣接地を京大に寄付したので，国立霊長類研究所はモンキーセンターに接して出来ることになった。宮地さん達はこの研究所が出来れば，モンキーセンターは研究所でなくなってもよい。むしろ研究は総て国立の霊長類研究所にまかした方がよいと考えたらしい。そして現在モンキーセンターに勤めている研究者は皆国立霊長類研究所にひきとってもらおうと考えた。しかし国立の霊長類研究所が出来ると，新しくきまった内部組織により，研究者を募集したので，モンキーセンターの研究者のかなりの部分は移って行ったが，移籍が巧く行かずに，モンキーセンターに残った研究者が，かなりの数だった。彼等をどうするかを考える時，宮地さん達はモンキーセンターを単なるサルの動物園にしたかったらしく，彼等はもう必要としないから，自由にやめて行ってくれと言うようなことを言ったらしい。

センターの将来と残った研究者の処遇に就いて，研究者達と所長の議論がかみ合わず，センターの仕事が動かなくなってしまったのだ。私は改革の委員長をして，結論の要点を述べた。モンキーセンターは霊長類の研究所として存続させる。しかし，研究は流動的な研究員を数名置いて行ない，専任の研究職は廃止する。現在残った研究者は本人はもちろん，センター所長も協力して，研究者の納得する職場を見付けて，新しく就職してもらう。どうしても色々な事情からセンターから出られない人は，本人と充分話しあった上で，センターの学芸員になり，付属動物園の運営に協力してもらう等が，この骨子だった。

私も改革案を出した責任上，宮地さんに退職し

てもらって，センターの所長を引き受けることにした。そして５年という任期を決めて，その内に改革案を実行にうつすことにした。これぐらいでモンキーセンターの話はやめておくが，このセンターの所長在任中，私は環境庁の審議員になった。私の専門は森林及び樹木と森林だと思っていたのに，環境庁は私がモンキーセンターの所長だから，動物フことも解るはずだと考えたらしい。私は動物部門の審議員をさせられることになってしまった。

環境庁自然保護専門委員

私は生態学の一分野の森林生態学を専攻しているが，森林生態系は単に樹木の集まりではなく，そこに森林に依存する動物もすんでいる。サルの中にはサバンナや草原にでたものもあるが，大部分のサルの仲間は森林を生活の場にしている。森林生態学を専攻する私が，モンキーセンターの所長になっても別におかしいことはないと思って，委員会の委員長も所長も引き受けたのだが，世間ではモンキーセンターの所長は動物学者だと言う暗黙の了解が成立しているらしい。私は動物にも興味があったので，環境庁の動物部門の委員は引き受けた。４年間ほど務めたが，その間の大きな問題は，ドバトを狩猟鳥にすることと，数個体残ったトキを全部捕獲して人工飼育をする問題であった。

くわしい事は省くが，ドバトには多数の傳書バトが混している上に，ある所では有害鳥とされる一方で，子供の遊び相手にもなるらしく，糞の害は言われても，お寺なんかでは大切なハトだし，人によっては平和のシンボルとして給飼している。また害鳥になっても捕殺することはほとんどないのではないか。住む場所が銃などの使えない街のなかのことが多い。捕獲が必要な時は従前通り，申請してやれば良いから狩猟鳥にするのはやめた方が良いと主張し，この件は委員の大部が同意見であったことから，そのままで意見は通った。

トキの件は，捕獲しても，色々な原因から有性卵産卵の出来る実際のペアーは出来そうにもない。それなら強いて全数を捕獲する意味がない。もう全滅寸前なのだ。それなら最後の野生のトキを人工飼育してケージで殺すのは可哀相だ。捕獲をやめて，むしろ彼等の好む汚染されていないドジョウの多くいる水田を作ってやり，いじわるのカラスを駆除して，野生のままで最後を迎えさせてほしいと，全数捕獲に私一人反対したが，おしきられてしまい，トキは全部捕獲されて佐渡で人工飼育されることになった。結果は私の予想通り，ひなは一羽も生れなかった。後で中国産のトキを借りて来て，一羽だけひなが出来たが，これでは動物園で見せ物にするだけだろう。同じ様に絶滅に近い種だったコウノトリは，うまく行って増殖しているが，野生にかえすのが大変だろう。

環境庁への出向者

環境庁は関係各省からの出向者多かった。出向者で課長などの席についている者がかなりあった。鳥獣保護課の課長は私の務めていた林野庁の出向者が交替で来ていた。私が林野庁にいた頃には，野生鳥獣の保護の仕事は林野庁でやっていたのだ。今でもその流れで，野生鳥獣の保護の課長は林野庁出向者なのだ。ところが林野でやっていた鳥獣保護の政策の主要部分は，有害鳥獣の駆除だった。私が環境庁で，鳥獣保護の審議員をしている時の課長には時々あったが，彼の机の上の本立に立っている書類の綴りは大部分有害鳥獣駆除の申請書類だった。そこで私は長官の鯨岡さんに言ったものだ。「鳥獣保護課長は駆除課長だ。林野庁出向の課長では，ほんとうの保護課長にいたらない。

やっと保護課長らしくなった頃には林野庁へ帰って，また新人に一から鳥獣保護の教育をすることになって，仕事にならないから，林野出向をやめたらどうだ。」と申し上げた。鯨岡長官は，「林野の技官が鳥獣の保護の必要性を環境庁で十分知って林野庁へ帰ったら，林野庁の考え方が次第に変るだろう。」と言う。私は，「そうはならない。林野で技官として務めるにはもう一度逆戻りして，有害鳥獣駆除に専念しなければならないから，また元のもくあみに返るだろう。」と答えておいた。この後で長官は出向者はもういらないと明言して，他省庁に大部やられたらしい。ともかくこんなことで，私がモンキーセンターの所長をし，環境庁の動物部門の審議員をした結果，植物ばかりでなく，動物の保護にも明るいことになってしまった。

逗子のワシ・タカ問題

その動物のことで，最初に私が引っぱり出されたのは，逗子の米軍弾薬庫跡地での米軍家族の宿舎を建設することに関連した，弾薬庫跡地内の森林にいる猛キン類の調査だった。逗子には山階鳥研の所員だった，柴田敏隆氏がいるので，逗子の市長は最初に彼に頼んだ。ところが氏は，「私では弱すぎる，四手井を調査隊の長になるよう頼んでみなさい。」と市長に言った。あの市長は京大理学部出身なので早速上京していた私の所へ来て，隊長になれと説得した。私は調査隊の人々の名を聞いて，皆が有名なワシ・タカの専門家なので，やむを得ず了承することになった。

私は米軍の軍人が来日して一団地に集中して生活することに，元々反対だった。このワシ・タカ類の調査に参加して，はじめて米軍基地問題の一端に触れることになった。この逗子の調査は大変だった。米軍が旧弾薬庫の跡地内へとうとう入れてくれず，その本部から調査せざるを得なかった。委員は皆ワシ・タカの専門家だから，色々な手段を講じて，例えば夜行性のものには，テープに吹き込んだ，ワシ・タカの声を聞かせて，それに応じる個体の位置と数を調べるとか，色々なことから，ワシ・タカの住む数や，飛来する数や種類を調べ上げて，一応市への報告書は造った。市長はこれを利用したが，米軍宿舎建築はやまなかった。米軍が日本の防衛に協力する気なら，その家族は，特別の枠内の宿舎でアメリカ式の生活をするのではなく，日本の市民に変わって楽しく暮す必要があるのではなかろうか。

関西学術研究都市のワシ・タカ問題

この問題とは前々から関係していた。京都，大阪，奈良の３府県にまたがる学術研究都市は，現在も計画が進行している。この都市開発のための土地造成作業中に，広い里山の方々にオオタカが生息していることが分かって来た。このオオタカの生活に支障を与えずに，都市開発が出来ないかと言う，大変困難な問題が，私の所へ持ち込まれた。

先ず第一番目に問題になったのは，この里山開発の中心地区の記念公園のアカマツ林にオオタカがしばしば飛来し，よく探したら，現在は使われていないが，巣があることも解った。そこで自然保護団体が，公園造りに反対しだした。そこで私は公園造成計画の見直しを京都府知事に提案した。その内容を概説すると，当初の公園計画では，現存する池が，地形から見て深すぎるので，一旦，今ある池を埋め立て，その上にもう一度池を作り，これを中心に公園にすると言う案だった。これではオオタカの飛んで来る自然のマツ林もなくなり，巣もなくなってしまう。

そこで私は，現存する池をそのままで使い，池の南半分に人工の入った造園をするが，北半分と

マツ林の大部分を残したらどうかと言う提案をした。この提案は受け入れられ，おおよそこの線に沿って公園が作られた。保護団体の人は，出来て開園式のあった頃には，タカがいなくなったと言っていたが，その後何も文句を言って来ないから，タカは飛んでいるのだろう。古巣は別の都合で放棄したのだから，営巣することはなさそうだ。

次は同じ学術都市内だが，少し離れた木津地区として開発が予定されている地域に，オオタカが一番い営巣しているのが発見された。そこでこの地区をどうするかが問題になり，すぐ私の所へ持ち込まれた。そして数人の委員と共に善処方法を考え，南北に長いこの地区を3区分し，最北のオオタカの巣のある地区，約50 haをそのまま残し，立入禁止にした。オオタカも里山の鳥でアカマツの尾根筋にある太いものを見付けて，その枝に営巣する。マツ類は輪生枝なので，巣が造り易く，峰筋に近いと，警戒に便利だからだろう。中部の北よりの部分5〜60 haを研究機関を導入する地域とし，このゾーンではマツ林をそのまま残し，一般の実地開発のような裸地にすることを禁止し，建物はマツ林の中に建てることにした。そして南部を宅地開発地とし，出来るだけ林の多い地区にすることを求めた。大よそこんなところで木津町は満足し，保護団体も自分等が言った通りになったと公表した。しかし不思議なことに保護団体と私はこのオオタカの保護問題では一度も話し合いを持った覚えがないのだ。これは彼等の一人相撲だろう。その上，当時まだ2羽のひなは巣にいて親が保育している最中だったので，記者会見の時，巣立つまでは写真をとるなどのために近寄らないようお願いして，記者の了承を得た。写真は当方で当時，カメラを巣の近くに固定してとっているから，巣立った後で，その写真を送る約束をした。所が意外なことに自然保護団体はしのび込んでひなの写真を大きくとり，次の日に各社へ送ったらしい。次の日，各社から苦情が来た。新聞社に禁止を言いわたしときながら，自然保護団体は野放しかと言うのだ。自然保護団体にも同じ様に禁止したのだが，彼等はぬけがけの功名に走ったらしい。バードウォッチングは何時やってもよいことだと思っているらしいのだ。こうなると自然保護団体も信用ならない。やむを得ず，巣立つまで監視人をおくことにした。

舞鶴市のワシ・タカ問題

舞鶴市の村道にクマタカの巣が2つあり，それを保護するために林道の完成が遅れている。市は根気よく，タカとつきあいながら工事を進めている。営巣年は大凡隔年ごとなので，ひなを育てない年には注意しながら工事を進め，ひなを育てる年は休むと言うことをくり返えし，大体危険地区は通り越したので，今後は工事も進むだろう。完成までにはまだ相当の年数がかかり，費用も予定をはるかに超えてしまったが，舞鶴市は私達委員の言うことをよく実行してくれている。成功の暁にはまた報告しよう。

舞鶴市の近くではもう一つ，関電の水力発電所造成時，そこへ進入する道路近くにイヌワシの巣のあることが解ったが，これは関電が危険個所を長いトンネルでぬき，トンネル工事の騒音を外へ出さぬ努力をしてくれて，道も無事通ったし，クマタカにも影響はなかった。

更なるワシ・タカ問題

さらにもう一つワシ，タカの問題が出て来て目下その処理をしている所だ。これも進行中なので，くわしい報告はまたの機会にするが，クマタカとイヌワシの住む山中で関電の揚水ダム工事が進行中だ。この場合も道を計画変更はしたが，揚水ダ

ム工事は行うこととして，ダム工事とイヌワシ，クマタカの保護を同時にやっている。クマタカはどちらかと言うと里山の鳥で，何処でも大きなアカマツを見付けて営巣する。ここでも道路の近くのアカマツに巣を造っているが，ここでは大変うまく行っていて，工事の始めからほぼ隔年に２羽づつのひなが巣立っている。

イヌワシは，採石場を予定していた近くの岩峰の岩棚に営巣しているが，何回かひなの養育に失敗している。その上数年前，台風が２度このあたりを通過したことで岩棚がくずれて営巣がむずかしくなったので，人工で修理してやった。その後も近くをとんでいるのだが，今度は雌鳥が行方不明になった。現在新しい雌が出て来ているが，また営巣にまではいっていない。所は伊吹山の北部の滋賀県と岐阜県との県境で，古い両県に通じる道もある所だ。ワシ，タカ共に案外人ぎらいではなく，人里近くに住んで，農地で餌の魚類やヘビをとらえて食っている。